子どもの指導にかかる配慮事項⑦　平成３０年１１月２日（金曜日）

主幹教諭　横田　聡

「　この時期だからこそ、日頃のかかわりを見直してみましょう　」

ふと気がつけば、すっかり秋も深まってきました。一年の内で一番学習する時間が多い２学期も折り返しを過ぎ後半にむかっています。子どもも先生方も色々な面で見通しがもてるようになり、そのことによりお互いが意識しないととれなかった距離感も当たり前にとれるようになってきたことと思います（このことがなれたね、ということばで表現されることです）。そこで、この時期に再度、各々のかかわり方や子どもの特性、子どもの過去の育ち、体験等を振り返ることで、より安心して学ぶことができる環境を整えていきましょう。

○　***「環境に反応しやすい子ども」にとっての最大の環境要因は「大人（教師）」です。***

成長過程、発達過程にある子どもたちは、元来、環境に反応しやすいという特性をもっています。さらに本校で学ぶ子どもたちのように自分自身の在り様を構築することや環境への対応がうまくいかない特性のある場合には、なおさら反応の程度やあり方に難しさが現れることは当然であると言えます（どの教育課程で学ぶかに関わらず）。その環境には、空間（場）、時間、活動、気候等色々あります。が、その中でも最大の環境要因は「人（大人、教師）」であると言えます。言い方をかえると、それだけ子どもたちは教師を意識しているということであるとも言えます。私たち教師がそのかかわりの中でもっとも頻繁に活用し、大切であるとしていることが「伝えること」であり、その手段が「ことば」であり「言動」であるかと思います。

○　***子どもの障がい特性という素因から考えられること***

素因としては、物事のとらえかた、見方、聴き方、考え方等に現れる感覚、「感覚特性（知覚過敏）」と言われるものです（**本校の子どもはこの素因がほぼ存在する、と考えてよいでしょう**）。この特性のある子どもにとっては、そうでない子どもたちの体験とまったく異なる体験として強烈に自己の中に侵入してきてしまいます。多くの子どもにとっては楽しい体験、空間、会話、話し、かかわりであっても、特性と言う素因をもつ子どもにとっては不安であり、怖い空間、体験世界として刻まれてしまう可能性が十分に考えられます。さらにそのことへの教師の無理解や配慮のなさによって、その体験世界が繰り返されてしまうことにより、子どもたちの成長や発達、自立（心）へ及ぼす影響は少なくないということを考えておく必要があります。

○　***過去の強い体験が大きな素因となっていると考えられること***

過去の時間において強いネガティブ体験としてその子どもの中に刻まれた体験をもつ場合においては、本人の意識化、無意識化に関わらず複雑性のトラウマ的体験となってしまっていることがあります。そのために概ね安定した日常生活を過ごすことができているなと感じられる子どもにおいても、あるひとつのことがきっかけとなり、その生活が不安定になってしまうことがあります。さらにその体験世界が頻繁に、より強烈にその子の中に再現されてしまうことによって、活動そのもの、学校生活そのもの、さらには家庭生活を送ることまでにも影響を及ぼしかねない状況になる、ということを考慮しておく必要があります。

○　***その両方が相互に絡み合っていると考えることが基本。***

上述した二つのことがそれぞれに存在するというように考えるのでなく、素因と体験は同時に複雑に絡み合い、さらにその程度によっては先に触れたようにその子の成長や発達、自立（心）等々までにも影響が現れるような特性をもっているという理解を基本としておく必要があります。言い換えれば、「このくらい」「その程度」は大丈夫、「その子のことではない」「〇〇さんに言ったことではない」からということは、少なくとも上述した子どもたちにとっては当てはまらないことであると思ってかかわることが大切なのではと思います。また、上述したような特性のある子どもさんは、自己（自分）と他者（周囲の環境）とが混在化していたり、現実と非現実との境界が不明確であったりなど、「自己シルダー（自己存在感）」が十分に構築しきれていないことが少なくありません。そのことで、より自分へのかかわりはもとより、自分ではない他者への教師のかかわりに関してもとても過敏になることが少なくないということにも十分に配慮しておく必要があります。

○　***保護者の思いも十分に受け止めることができる余裕を。受け止めることがなければ発信はできません。***

私たち教師は、「子どものことを受け止めている」「保護者のことも日頃から受け止めている」から、、、大丈夫というような理解をしばしばします。でも、何を受け止めることができているのでしょうか？受け止めるためには少なくとも、その子どもの障がい理解であったり、障がい特性であったり、その子が今に至るまでの体験であったり、さらには保護者や家族の文化（養育態度や保護者自身の育ち等）等の理解にも気を配り、理解しようとする姿勢をもつことが大切です（少なくとも、理解は難しくても、理解しようと努めることは可能なはずです）。　私たち教師が、子どもに向けて、保護者（家族）に向けて発信できるのは、子ども、保護者（家族）の思い等様々なことを受け止めようと努めるからこそではないでしょうか。　子どもの「今を大切に、それは将来を大切にすること、そのためには過去も大切に」していきましょう。